
息抜き力オス雑談！

仮面ライダーディケイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

息抜き力オス雑談！

【Zコード】

Z2341V

【作者名】

仮面ライダー＝ディケイド

【あらすじ】

息抜き雑談が、多分力オスになつて帰つてきた！まえの小説の記憶を失つた一人の少年の主人公の風見大介と、今の主人公の風見大介、作者も加えた、カオス雑談や新しい変身ツールも作る！

注意　駄文ですが、よろしくお願いします

ファイル1 大介∨S大介！？（前書き）

つい作ってしまった・・・後悔は・・・3割する（キリッ

ファイル1 大介VS大介！？

大「さて・・・ひとつ聞く」

ディ「なんだ？」

大「この空間を作ったことぐらいならまだ良い・・・」

ディ「?どうした?」

大「あのは・・・」

ディ「??」

大「なんでお前の前の小説の「記憶を失った一人の少年」の方の風見大介がいるんだよ！」

大2（これからは記憶を失った少年の方を大2つてよびます）「そんなの簡単だ！・・・暇だから！」

大「・・・作者。あとでモンスターハンターのイビルジョーに食わせてやる・・・」

大2「安心しろ作者。そのときは俺が守つてやるから（うそだがな）

「

大「・・・おい、勝負しろよ」

大2「オーケー。久々に、楽しめそうだ」

訓練場・・・

大2「そつちはもう準備オーケーか?」

大「ああ」

・・・・

ディ「レディ! ファイト!」

大「ゴーカイジェンジ!」

『ゴーカイジャー!』

大2「ゴーカイジャーか・・・ライダー! セットアップ!」

ラ『イエス。セットアップ!』

大「・・・セットアップした姿が、仮面ライダー1号ってどうなん
だよ」

大2「気にするな。ライダークリムゾンキック!」

ドゴォン！

大「危ない危ない・・・しかし、カブトのライダー・キックにクリムゾンスマッシュのフォトン・ブレイブを足しただと！？」

その後も戦いは続き・・・

大・大2「ファイナルマスター・・・スパーク！」

・・・・・

大「ティメン・ショーン・キック！」

大2「ライダー・回転・キック！」

・・・・・

大「ブラック・マジック！」

大2「ラス・オブ・ネオス！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ディ「勝負あり！・・・・大介2の勝利！」

大2「おばあちゃんは言つていた。おれは風の行くまま、どこで
も行く風の男・・・風見大介だと！」

大「いつつ・・・あそこでゴーカイガンが当たつたら隙ができるで
てたとおもつたんだが・・・・」

ディ「まあそうだな」

大2「まあでも結構強かつたぜ！」

大「次回！俺達は、遊戯王の世界のデュエルアカデミアに入学する
ことになった！もちろん、遊戯十代もいて・・・クロノス先生と戦
うことになった！初めて使う戦隊＆ライダー『ツキ』はたして大介
は勝てるのか！」

ディ「次回！遊戯王編！」

ファイル2 ライダー＆戦隊クイズ！

分「さあはじまりました！」このクイズは、ライダーと戦隊のクイズを出します！出場者は、いつもメンバーや、もやし、クウキ、ナツミカン、コソ泥のディケイド一向が出場します！出題者は、クイズ・マシーン！レッツ・ゴー！

『1問。デカレンジャーの戦士の人数は？』

ボーン！

『門矢士』

士「8人！」

ブツブー！

士「いてつ・・・」

ボーン！

『海東大樹』

海東「9人！」

ブツブー！

海東「いたつ！・・・え！？映画のをあわせたらこれであつてるはず・・・」

ポーン！

『風見大介2』

大2「十人！」

『正解だ。デカレッド、デカブルー、デカグリーン、デカイエロー、デカピンク、デカブレイク、デカマスター、デカスワン、デカゴールド、デカブライトの十人だ』

士「おい！デカブライトって何だよ！？」

『テツの元上司。以上！第一問。オーズのコンボの数は？』

士「十個！」

『正解だ』

夏「え！？タトバ、ガタキリバ、ラトラーター、サゴーザ、タジヤドル、シャウタ、プトティラ、タマシー、ブラカワニの九個じやあないんですか！？」

『恋愛コンボも含まれる』

士「（間違えて、十つて言つてしまつたが・・・まさか合つてたと

は

『次だ・・・これは難しいぞ。オール仮面ライダー。ライダージェネレーションの、一番右端のライダーは?』

士「わかるか！？」

夏 - 分かりませんよ! -

ユー俺もわからなーいよ！？

海東「これがわかつたねす」いよ!?

大・おれ買^フて遊んだけど、覚えてるわけねえだろ!!?」

大2 以下同文

デイ「右に同じく」

『正解は・・・・覚えていない』

全『おい！？』

『後半へ続く！ちなみに、後半はバトルだぞ』

全『おい！？』

ファイル3 バトルスタート！

『これよりバトルをはじめる。作者とクウキは異次元に飛ばした』

大「なんとも哀れな・・・ゴーカイチエンジー！」

『ゴーカイジャー！』

大2「・・・変身！」

『キャストオフ！チーンジ・ビートル！』

士「変身！」

『カメンライド！・・・ディケイド！』

夏「キバーラ！」

キ「はいはい、行くわよ！」

夏「変身！」

『実況と解説はわたしがやる。おおつと！キバーラが即座にゴーカイレッドに切りかかった！だがそれをゴーカイサーベルで軽々しく受け止める！おおつと！キックだ！回し蹴りキック！キバーラ吹き飛ばされる！アウトオオオオオオオオオオ！ちなみに、かつたチームが、賞金を手にできるぞ』

士「何！？・・・なら、これだ！」

『カメンライド・・・カブト!』

『アタッククラウド・・・クロックアップ!』

大2「げ！？クロツクアップ！」

『クロックアップ!』

大「ライダー チェンジ！」

『ハイパー・カブト!』

大「ハイパークロックアップ！」

ハイパークロックアップ!

『マギシマムハイバー サイケロン!』

大2・士一ぐああああああアああああああああああああああ?

『決まつた・・・優勝者は風見大介だ!』

大2「……ハイパー・ゼクター呼べばまだわからなかつたのに！？」

大「やつぱり俺は強かつた！」

『お前には、賞金一億円をやるつ』

大「つしゃーこれで、3D が買えるー」

ディ「やつと戻つてこられた・・・あ、そりそり。つきからは、記憶を失つた一人の少年のリメイク版を予定しております！練習代わりなので、よかつたら、見てくださいー」

ファイル4！ 記憶を失つた一人の少年1！（前書き）

せん
すいません。基本リメイク版なのに、台本描きです。すいま

ファイル4！ 記憶を失った一人の少年1！

? 「・・・」はどこだ?』

俺は森の中にいた・・・覚えていること・・・自分の風見大介という、名前と、仮面ライダー・・・スーパー戦隊?何だこれ・・・

?『お目覚めですか?』

いきなり俺の右腕のブレスレッドが喋った!?

?『驚かせてしまってすいません。私は、ライダーといつ名前です』

大「そ、そとか・・・よろしくな」

ラ『はい、よろしくお願ひします、マスター』

大「ところで、何で喋れR「イー————ツ!..」!?何だ!』

ラ『・・・マスター!—その草むらに隠れてください!』

俺は、すぐに草むらの影に隠れた・・・なんだあいつらは?全身が黒タイツ・・・くつ!?

ラ『マスター!—?大丈夫ですか!—?』

・・・・・・

俺は、何故か草むらを飛び出した

ラ『マスター！？なにやっているんですか！？』

大「・・・ライダー、何故か分からぬが、俺はあいつらの事を知つてゐる」

あいつらは、ショッカー戦闘員・・・

ラ『え！？』

シ「イーッ！（略）見つけたぞ！覚悟しろー（）』

大「・・・パック展開！」

俺が、無意識にそういうたと同時に、空間が開き、その中から、あるものを取り出した・・・それは

大「モバイレーツとレンジヤーキー・・・うつ！？・・・使い方は分かった。行くぜ！ゴーカイチエンジー！」

俺は、そのレンジヤーキーを、フィギュアから、キーの状態にして、それをモバイレーツに差し込んだ

『ゴーカイジヤー！』

シ「イーッ！？（かかれえ！）』

変身したと同時に、ショッカー戦闘員が、飛び掛ってきた。が

シ「イーーッ！？」

光がでたと同時に、吹き飛ばされた。そしておれは自身あつぱり
う名乗つた

大「ゴーカイレッヂ！」

シ「イーーッ！（な、ゴーカイレッヂだと…）」
（…）

驚いたような顔をして、立ち去つていった…・戦えなかつたし、
不幸…・・なのか？

大「ふう…・・！」

俺は、変身を解いたと同時に、倒れてしまった

「『マスター！？どうしたんですか！？マスター、マスター――
――！？』

? 「ほう・・・俺が放つたショッカー戦闘員を倒したか・・・転生者だな。あいつを殺して、なのは達をメロメロにしてやるー」

物語は、転生者を3人迎えていた・・・

記憶を失った一人の少年2

大「……？」「は……どこだ？」

気がついたら俺は資料が沢山ある所にいた……？

？「気がついたみたいだね」

大「！？」

いきなり声がしたので、声がしたほうをむいてみた

ジエ「私はジエイル・スカリエッティ。あ、君のデバイスだ」

そういう、俺にライダーを投げてきた

ラ『マスター……もう、私お嫁にいけません……シクシク。機械なので、お嫁にはいけませんが……シクシク』

大「……あはは。所で、何で俺がこんなところにいるんだ？」

ラ『私が転送魔法を掛けたからですよ。私は基本、マスターが生きて、尚且つマスターが持っていたらいつでも使えます』

ジエ「すごいねえ……もう一回君の構造W『お断りです…』……冗談だよ

「こいつ、マジでやる気だつたろー!?

大「もう一つ。何で助けてくれたんだ?」

ジエ「気まぐれってやつだね…何故かほつて置けないって感じがしたんだよ」

大「ふうん…」

その後、俺とスカリエットは色々話しあつた。

ジエ「私はこの世界を、ゆりかご」という兵器で変えようと思つんだ。そのためには、君の協力も必要だと思つ。だから、力を貸してくれないか?」

大「上等だ。ただし、ここに住ませてくれよ?」「ああ」ところでひとつ聞かせてもらつ…・・・何をすればいいんだ?「レリック」という、紅い石?を集めればオーケーだ」それをやるのはいつだ?」

ジエ「…・・6年後だね」

はあ・・・

大「それまでちよつと旅に出ててもいいか?」

ジエ「構わないよ。6年後に、帰つてきてくれれば、それでいい

大「じゃあ、いつてくれるぜー!」

ジエ「ああ！」

俺はその基地から出て行つた・・・とはいつたものの

大「どうしようかねえ・・・！？くつ・・・」

ラ『マスター！？大丈夫ですか！？』

ライダーがそう俺に呼びかけてくる

大「・・・ああ、大丈夫だ。それより一つ聞きたい事がある」

ラ『なんでしょう？』

大「仮面ライダーカブト・ハイパーフォームって知ってるか？なんかしらんが、勝手に記憶がながれ混んできたみたいなんだが・・・」

ラ『カブト・ハイパーフォームは、カブトの強化形態で、ハイパー フォームが持つ、ハイパークロックアップは、光の速さを遥かに超えて、移動出来ます』

大「・・・やつてみるか。カブトゼクター！ハイパーゼクター！」

突如、上空から赤いカブトムシと、銀色のカブトムシが飛んできた

大「変身！ハイパーキャストオフ！』

『ハイパーキャストオフ。チェンジ・ハイパービートル！』

大「・・・理解した。ハイパークロックアップ！」

『ハイパークロックアップ！』

そして俺は平行世界を移動した。いろんな世界に行き、いろんな奴にあった。通りすがりの仮面ライダーとか、宇宙海賊とか、キングオブ・デュエリストとか、博靈の巫女とか・・・まあ色々だ。そして、六年はあつという間に過ぎていた・・・

視点？

ハーヴィ！俺は天道零時！浴に言つ、転生者なんだ！

能力は

全仮面ライダーに変身できる能力

魅了のスキル（自分が15歳以上にならないと効果は出ない）

王の秘宝ゲートオブ・パビリオン

何でも召喚できる

どうだ！最強だろ？！

見た目は、天道総司そのまま！ははは！俺が主人公だ！

な「天道くん！」

おっ、いとしのマイハイーが来たか！

天「どうしたんだいなのは？」

な「大好き！」

フ「私だつて！」

は「うちだつて！」

シ「私だつて！」

シャ「私もよ！」

全「天道！（くん）（さん）大すき！—！」

視点？

私は、マリア・レイ

浴に言う転生者ね。私は、反管理局「ブルーフリー・ダム」の一番上の人間。能力は・・・

剣の扱いを最大限にまで引き出せる

頭の中で創造した剣を手元に出せる

クロックアップ並の速さを出す」とができる

ジェイル・スカリエッティとは、4年後辺りに、共闘するつもりだ。
なぜかつて？
彼は、悪そうなやつではなかつたからだ。

だが、そのジェイルの研究所に、前に訪問したときに、隠しカメラをつけた。

念のためだつたが・・・悪い人ではないようだ

そして、今日。転生者みたいな子供がジェイルの研究所に転送した。デバイスが勝手に転送したらしい・・・謎だ。あの子は、記憶を失っているのは本当みたいだが・・・

「まあこの事はあとにして、問題はあのなのは達の中にいる転生者ね。みたところ、訓練もしつかりしているから、一筋縄ではいかなさそうね・・・」

こうして、六年後。全ての物語が始まった……。

記憶を失った一人の少年3！

大「・・・ライダー？」

ラ『はい』

大「俺は、スカリエッティの所に転送しちといったよな？」

ラ『はい』

大「ここは？」

ラ『・・・リニアレールです』

大「スカリエッティに頼んで、バラバラ」「それだけは止めてぐださいマスター！」つたく・・・

ラ『ここにはレリックがあるのでそれをついでに取っていきましょう』

・・・こいつ、話を誤魔化したな？

大「ししゃあない、いくぞティーダ」

テ「わかつたぜ」

こいつはティーダ。いろんな所を旅している時に、こいつが死にかけだったので助けてやった。どうやら、管理局が隠密に殺したと思つてたみたいだな

・・・少年移動中・・・

大「やつとついた『そこの人！とまりなさい！』・・・誰だ？」

後ろから声がしたので、振り向いてみるとそこにはオレンジ色の髪の毛の女の子と、青髪の女の子がいた

テ「時空管理局機動六課スタートーズのティアナ・ランスターです！ここでなにをしているんですか！？」

大「げ・・・」

ラ『マスター、戦いましょ、う』

大「それしかないな」

テ「事情聴取のため、動向を願います」

大「断る！」

テ「・・・それなら力づくでも！」

大「出来るならなあ！パック展開！サモン！ラッパラッター！」

俺がそう呼ぶと、手にラッパラッターが現れた

大「ふむ・・・これだ！」

俺は、ラッパラッターをもう一個だし、レンジャーキーというものをラッパの上の部分にさし、ラッパラッターを吹いた

大「～～」

俺の前にある戦隊が現れた・・・それは

「デカラッド！」

「デカブルー！」

「デカグリーン！」

「デカイエロー！」

「デカピンク！」

「デカブレイク！」

「デカマスター！」

「デカスワン！」

「デカゴールド！」

「デカブレイト！」

『特捜戦隊！デカレンジャー。』

大「警察には警察つてね あとはよろしく～！」

そういう、俺はレリックケースを持つて転送した。ティーダ？あ、
あいつ空氣だつたな・・・

テ「・・・すいません」

ス「・・・すいません」

は「それよりも、この召喚した男が気になるなあ・・・」

天「ま、どうせ俺の敵じゃあないぞ」

は＆フ＆な「キヤ～～～～～！天道君格好いい！」

テ＆ス「（なんで部隊長たちはこんなブサイクの男が好きなんだろ
う・・・）」

大介達の戦い？見ていた人がいた……

?「あれが新しい俺の力の後継者、風見大介か……よし、あとで会
つてみよう」

その者はかつてインフェルシアから地球を守ったマジレンジャーの
マジレッド、小津魁だつた……

スカリエットのアジト内部

大「よ、スカさん」

ス「ああ、大介。久しぶりだね」

大「そうそう、これ俺の土産ね」

ス「・・・レリック? まさか、リニアレールにいた未確認つて・・・」

大「すまん多分それ俺」

ス「・・・本当にきみは凄いねえ・・・」

大「それが俺!」

ス「そうそ、君がいない間に反管理局と手を組んだんだよ。たしか、ブルーフリー・ダムだったかなあ・・・」

? 「それであつてるぞ」

大「!?

いきなり声が聞こえたので後ろを向くと・・・女がいた。っていうか、このパターン結構多いな

レイ「驚かしてごめんなさい、私はマリア・レイ。いきなりだけど、風見大介。貴方に話があるの。着いてきてくれない?」

大「? 別に良いけど・・・」

そして、俺はレイに着いていった・・・

記憶を失った一人の少年3！（後書き）

紅　幽鹿様感想ありがとうございます！

記憶を失った一人の少年4！

視点大介

訓練所にきたら、突然レイに剣を向けられた

レ「ためさせてもらおうか。お前の力を！」

そういう、俺に切りかかってきたが、俺はすぐに右によけた。そう、
よけたはずだった（・・・・・・）

大「ぐつ！？」

ラ『マスター！クロックアップです！』

大「クロックアップ！」

俺は、ライダーの補助がありの条件で、カブトライダーズじゃなく
ても、クロックアップが出来るようになつた

大（こいつ・・・剣の扱いに慣れている！）

そう思いながら、俺はブレイラウザーを手元に出し、切りかかつた！

ギイン！ギイン！

剣と剣のぶつかりあいで俺もレイももうあと一発くらいしか全力を
出せない

レ「次で決めるぞ！……三刀流奥義！三・千・世・界！」

！」

大「……」

ドオオオオン！

レイ視点

決まった……やはり、転生者は皆自分の力に頼るしか方法がないのか。自分の技も磨かないと、相手には勝てない。

大「おいおい、決まったとでも思ったのか？」

な！？

大介視点

大「危なかつたぜ。ライダー、ありがとな」

ラ『いえ。当然の事でしたまでです』

ぶつかる直前に、ライダーがプロテクションを張ってくれたから、助かつたぜ。

大「今度はこっちから行くぞ！ライダー！メダルシステムの準備は

！？』

ラ『バリバリでオッケーです！』

大「行くぞ！メダル挿入！」

『タカ！タカ！タカ！クジヤク！クジヤク！クジヤク！コンドル！コンドル！コンドル！超ギガスキャン！』

大「はああああ・・・セイヤアアアアー！！！！！」

俺は、集中力を高め、火の鳥をレイにぶつけた。

ス「何の冗談だいこれは？訓練所が崩壊しているジャマイカ！？』

大
「
」
>
<

記憶を失った一人の少年5 燃える炎のHレメント

大「ううむ・・・」

ス「どうしたんだい、大介?」

大「それが、ゴーカイジャー以外のレンジャーキーが全でないんだよ。まるで、魔法で消えたかのように」

そう、俺はレンジャーキーをちょっと使おうと思つたら、いつの間にかなくなつていた

ス「おかしいねえ・・・あ、そつそつ。ナンバーズの事を忘れていたよ」

大「ナにそれ?」

ナンバーズつていつたら、希望皇一 プくらいしか思いつかないぞ? そう思つていたら一人くらい中に入ってきた。

ス「右からウーノ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウエンティ、ディードだよ。ここにはいないけど、ドゥーハつていづこもいるよ」

大「なるほどねえ・・・レンジャーキーでも探してくるわ」

ス「分かつた」

そして、俺はレンジャーキーを探しにいったが・・・

大「何でゴーミン、スゴーミンがいるんだよー!? もう仕方ないー!
ライダー...セットアップ!」

ラ『オーライ、セットアップ!』

大「うひあああーーー!」

まづは2体のゴーミンをラリアットで倒し、そのゴーミンを頭にして上にジャンプレスゴーミンめがけてキックし、トライアルもビッグ

クロ一の速セドロー三郎、スロー三郎を殴り倒していく。

大「やつと倒せたかあ・・・」

? 「君が風見大介だね?」

突如、後ろから声が掛けられたので、振り向くと黒いロープを身にまとまっている青年がいた。

「僕は小津魁。君は後一回戦いつて死んでしまう

その言葉に俺は反応する

大「なにへどうこう」とだ

魁「君は、戦いすぎた結果、後一回戦いをすると死んでしまう体になつた」

（後編に続く）

記憶を失った一人の少年5 燃える炎のHレメント（後書き）

次回の魔法少女リリカルなのはは

大「くつ・・・やはりあいつがいっていたように、体が・・・」

魁「分かつたようだね。それでも戦うかい？」

大「これが、俺の選択だー・マージ・マジ・マジーロー！」

「・・・全てを見つめる者は次に何を見る！？・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341v/>

息抜きカオス雑談！

2011年10月10日11時30分発行